



The Pragmatics Society of Japan
日本語用論学会

NEWSLETTER

<http://www.pragmatics.gr.jp>

No.39 / Spring 2018

会 長 加藤 重広

事務局 〒606-0847 京都市左京区下鴨南野々神町 1

京都ノートルダム女子大学 人間文化学部英語英文科 小山哲春 研究室内

事務局連絡先 psj.secretary@gmail.com

郵便振替口座 00900-3-130378 口座名:日本語用論学会

ゆうちょ銀行 ○九九支店 当座預金 店番号 099 口座番号 0130378 日本語用論学会

《会長再任のご挨拶》 「銀の雨」とあいまいな記憶

日本語用論学会会長
加藤 重広 (北海道大学)

知里幸恵編訳の『アイヌ神謡集』の冒頭には、フクロウの神さまが謡う「銀の滴降る降るまわりに、金の滴降る降るまわりに」のお話が出てきます。これを初めて見たのは中高生の頃だったと思いますが、記憶はおぼろげです。実は、長らくこの詩（正確には訳詩ですが）の文句を「銀の雨降る降るまわりに」のように、「銀の雨」だと思っていました。不正確に記憶したり、記憶が抜け落ちたりすることにかけては、人後に落ちないのですが、相当長い時間誤ったままの記憶だったことに最近気づいて、愕然としました。おそらく三十数年にわたってこの話を人前で語ることもなく（よって、誤った記憶のせいで恥をかくこともなく）、結果的に修正されずに過ごしてきたのでしょう。

やはり中高生のころに、「銀の雨」という松山千春さんのフォークソングを初めて聞いたときに、彼は北海道出身だから『アイヌ神謡集』をモチーフにしたのだらうと思った記憶があるので、既にその時点で誤った記憶が強化されてしまったのかもしれませんが。しかし、今回、確かめてみたところ、「銀の雨」という歌は相手

の男性のことを思ってみずから身を引く女性の歌（現実にいるかどうかはわかりませんが、演歌などではよく出てくる女性像ですね）であり、一方、「銀の滴」は幸福の象徴であって、まったくモチーフが違うことがわかりました。表現上の影響がなかったとまでは断言できませんが、少なくとも内容やモチーフに関してはまったく無関係だったのです。最初から思い違いをしてそのまま時間が経ってしまったというわけです。

最近『アイヌ神謡集』を読み返してみても驚いたことがあります。「銀の滴降る降るまわりに、金の滴降る降るまわりに」とはフクロウの神さまがアイヌの人々を見守りながら口遊んでいる歌なのです。この歌を含む冒頭の神謡は、フクロウの神さまが人々の暮らしぶりを空からよく観察して、貧しいけれども正直な家族を幸せにしてあげるなど、いい話なのですが、フクロウの神さまは、見かけはフクロウなので子どもたちがフクロウにめがけて矢を射かけてくるという、フクロウから見たリアルな描写が含まれています。これだけ印象的な内容なのに、「滴」と「雨」の取り違えも含めて、肝心なところを正確に記憶していなかったのです。もっと言えば、フクロウが神さまで上から人々を見ているという程度のことしか覚えていないのでした。

今後さらに衰えていくであろう、自分の記憶力のなさを今更嘆いてもしかたないので、少し別の角度から考えてみることにします。法廷や

取り調べなどで目撃証言をする場合も、相手の聞き方によって記憶の細部が影響を受けることがあり、特に子どもの場合は、その影響が強くなりやすいと聞いたことがあります。「記憶の細部が影響を受ける」と言えばあまり重大ではないできごとのようですが、これは記憶の改変であり、それが外部からの影響で生じると考えれば重大なことであることがわかります。さらに、外部から意図的に記憶の改変を生じさせることが可能であれば社会的信義に関わる問題であり、それがもしも、判決や量刑判断に影響するのだとしたら、たとえ小さい影響であるとしても無視はできません。

しかし、上で述べた私の経験は、外部からの影響、少なくとも、特定の人からの意図的な影響を受けた結果、記憶が改変させられたというものではありません。自分の記憶の中で、意識せぬまま再構成・再修正が行われ、変質したものです。衝撃的な場面の目撃や歴史的な重大事件の経験など、特に記憶が鮮烈に刻み込まれたのであれば、それは容易に変質しないでしょう。ところが、詩の一節は基本的に文字情報であり、繰り返し暗唱していたわけでもなく、なんとなく記憶に収めたに過ぎません。今になって改めて見てみると、「滴」は「落ちる」もので、「雨」は「降る」ものだから、「降る降る」という印象的な反復のほうが記憶に残り、「降る」という動詞とのコロケーションとして一般的な「雨」へと無自覚のうちに置き換えられたのかもしれませんが。確かに、外的描写の叙述としては「滴が降る」のように私は言わず、「雨が降る」か「滴が落ちる」のように言い、自己視点から内的経験の描写として「滴が降ってきた」というくらいなのですが、それは日常的な言語感覚の一部に過ぎません。

文学作品として詩を創る営みは既成のコロケーションから逸脱して、新しい結びつきを使うことを重要な工程として含みます。とすれば、「銀の滴降る降るまわりに」は、訳出という制約を負いながらも、文学的な詩の創作の営みである以上、恣意的に変えてよいようなものではありません。しかし、意図せぬうちに記憶の中で細部が書き換えられ、あるいは、細部が失われてあいまいになっていき、ついには本来の姿からかけ離れたものになってしまうことがあるのです。もしかしたら、その大半に自分でも気づいていないのではないかと考えると、空恐ろしい気分になりました。

とは言え、逆の面から考えることもできます。記憶の総体とその時点における人間の精神性の正体なのだとしたら、あいまいにしたり、部分

的に改変したりすることで、人間は均衡を保っているのかもしれませんが。あるいは、不完全でも記憶の全体を保持するために、保持しやすいように記憶とは変質していく面があるとも思うのです。

もちろん、記憶は文学作品の一節や種々の情報だけでなく、みずからの経験も収蔵の対象としています。いわゆるエピソード記憶がそれですが、人間の記憶の中では感情と関わるこの種の記憶の方が重要で、保持されやすいとも聞きます。ちょうど2前の本欄で、はからずも会長に選出されてしまったことを記しました。これは、私の個人的な記憶でもあります。記録が残っていても、関心のある方はバックナンバーを見ていただくことが可能です。このあたりで現実的な報告に話題を転じたいと思います。

昨秋の選挙で会長に再度選出されました。今年度と来年度会長職を務めることとなります。改めてご挨拶を申し上げます。2年前はまったく予想していない事態でしたが、規定上2期までは可能とされているので、自分は適任と思わないものの、今回はそれなりの覚悟をしておりました。事務局長は引き続き小山哲春先生にお願いし、非力な会長を補佐して下さる副会長は、滝浦真人先生と鍋島弘治朗先生のお二人に引き受けていただきました。会計担当の長友俊一郎先生を加えた執行部で2019年度まで務めてまいります。

2年前の会長就任時のご挨拶では、創設メンバーではない私が会長を務めるということで、語用論学会は新しい時代に入ると感じていることを述べました。学会のような組織も学術研究のパラダイムも、伝統や基本精神を尊重しながら、時代や状況に合わせて変わっていかねばなりません。日本語用論学会は、昨年度20周年を迎え、記念大会を開催し、盛況のうちに終えました。今年の3月15日には、京都でスティーブン・C・レビンソン教授の特別講演会も開催しました。20周年に関わることとしては今年度は『語用論研究』の特集もありますが、他にもいくつか準備を進めていることがあります。

その一つが大会発表賞の創設です。発表時に大学院などに在学している会員あるいは40歳以下の会員を対象に、優れた発表をした方には発表賞を授与します。また、持続可能な学術団体を目指して少しずつ整理や改革も進めていきます。世間では「断捨離」もブームようですが、学会などの組織ではあまり機能していない規定や慣習があっても、すぐに廃止すればいいわけではなく、新しいしくみをどんどん導入していけばよいというわけでもありません。機動性は

大事ですが、長期的な展望に基づく見通しも重要です。50周年を思い浮かべるほどの先見性は私は残念ながら持ち合わせていませんが、25周年か、せめて30周年の時点でいまより活発に語用論と関連領域の学術交流ができ、学術的な貢献もできる学会となるよう、今できることは何かを考えていきたいと常々思っています。会員のみなさんのご協力をお願い申し上げます。

(加藤重広)

《寄稿》

PSJの20年を振り返って

日本語用論学会前会長
林 宅男 (桃山学院大学)

新緑の候、会員の皆様におかれましては、益々ご清祥にお過ごしのこととお慶び申し上げます。平素は本学会に多大のご支援・ご協力をいただき厚くお礼申し上げます。

本学会は、1998年12月の第1回大会での総会を以て正式に発足しましたが、その準備は前年の1997年の春、初代会長の小泉保先生の呼びかけで始まりました。第1回学会創設準備委員会は、京都駅のレストランで元会長の澤田治美先生、山梨正明先生を含む6人で行われ、私も縁あってその集まりにお声掛けいただきました。その後大阪のホテルでも一度簡単な集まりがあり、翌年1998年5月と7月に第1回、2回運営委員会が京都駅のホテル京阪13階「美濃吉」で開かれました（このお店は当時の者にとっては懐かしいところですが、2年ほど前に閉店になったようです）。そこでは、小泉先生の発案による設立趣意書や発起人をはじめ、組織の規約や第1回大会プログラムについて話し合われました。当時私は既に40歳半ばでしたが、その中では最も若いメンバーということもあり緊張したのを覚えています。その後小泉先生の私費による出資金を元に、本学会は15人の運営委員でスタートしました（その中で現在もこの組織に関わっているのは顧問の澤田治美、理事の山梨正明、林礼子の各氏と私の4名だけになりました）。

学会が発足した当時は、まだ現在のようなウェブサイトの利用や学会業務受託サービスもなく、その作業はほとんどが「手製」で行われ、論文投稿や審査は紙媒体で郵送(後にフロッピーディスク)、発表審査の評価の集計は卓上計算機の使用、ニューズレターの作成は大学の印刷機借用、という具合でした。しかし、当時は自分たちの研究分野に特化した新しい学会の活動が

始まるという喜びと期待感で皆が結束して積極的に活動していたように思います。私はコンピュータは苦手でしたが、第1回大会では簡単なソフトを使ってA4サイズの手製のカラーポスターを2種類作り自宅で印刷したことを覚えて

います。発足後しばらくは、組織の業務内容はまだあいまいで特定の委員の掛け持ちが多かったため、2003年12月に規約が改正され、学会を事務局、編集委員会、大会運営委員会、事業委員会、広報委員会の5つに分け、現在の組織の原型ができました。また、学会発足の8年後には当時副会長だった児玉徳美先生が組織の活性化を理由に事実上次期会長を辞退される形で選挙での会長選出を提案され、最初の選挙では澤田治美先生が第二代会長に就任され、その後山梨正明先生(2008年～)から林宅男(2012年～)、そして現会長の加藤重広先生(2016年～)へと引き継がれてきました。他に、過去5年間では、運営委員の構成員と大会開催地の全国化、学会事務の業者委託の推進の他、中国、台湾、韓国などアジアの研究者との間の組織的な国際交流など様々な改革に取り組んできました。

学会の一番大きな行事は年次大会です。第一回大会では半日のみの開催で研究発表は15件だけでしたが、大会参加者は180人を超え、直後の会員登録も100人近くあり、順調なスタートとなりました。この大会で特に思い出されるのは、最後は小泉会長が「川柳」の笑いの構造を語用論で分析するという非常に独創的な内容の記念講演をされたことと、会長の命で(中国語用論学会に倣い)この大会以降何回かにわたって運営委員も順に研究発表をすることになったことです。その後2006年の第9回大会では本学会としては初めての海外からの基調講演者となるJacob Mey教授を招きました。氏はインド経由で来日されましたが、到着後関空でスーツケースが見つからず、急遽私のスーツを着て講演をされました。服のサイズが偶然にも私と同じでぴったりだったので、ご本人も大変驚いておられました。その後も国際学会でお会いするたびに何度かそのスーツのことが話題になりました。翌年の第10回記念大会は2日間の特別開催で、海外からはTeun van Dijk, Jef Vershueren, Ziran He各氏3名の基調講演に加えて3名による懇話研究発表があった他、参加者も270名近くあり大盛況の大会でした。2007年の第10回記念大会以降は日程が2日間となり、海外からの著名な研究者の懇話も恒例となりました。またこの間、講演やシンポジウムに於いて、臨床医療のコミュニケーション、裁判と言語分析、15

回大会での災害とコミュニケーションなど、理論的な研究だけでなく、社会や生活と直結した研究テーマの取り組みも紹介されるようになりました。

本学会はその設立趣旨に沿って、年次大会の開催や学会誌『語用論研究』の発行の他、講演会や談話会の開催を通して語用論の発展と研究者の交流に努めてまいりました。こうして20年を振り返りますとあつという間でしたが、この間私たちは様々な活動を通してその歴史的使命と一定の役割を果たしてきたと思います。しかし、本学会は今後また違った形での貢献も求められているのではないかと思います。例えば、最近では多くの小規模の語用論研究会が持たれるようになりました。本学会としても、そのような新しい形の組織的な取り組みを支援し、大会や学会誌あるいは国際学会を通してより多くの方とその成果を共有するなどして、会員の皆様と一丸となって今後も言語研究の発展と社会貢献に寄与していくことが出来ることを祈っています。(林宅男)

*** 日本語用論学会第21回大会ご案内 ***

2018年度の第21回大会は、以下のとおり、杏林大学井の頭キャンパス（東京都三鷹市）での開催となります。会員の皆様からの発表ご応募・ご参加をお待ちしております。なお、未確定部分につきましては、確定次第、順次HPで更新していきますので、ご確認ください。

◆日時：12月1日(土)、2日(日)

◆場所：杏林大学井の頭キャンパス
(東京都三鷹市) F棟

〒181-8612 東京都三鷹市下連雀 5-4-1

※杏林大学医学部付属病院がある「三鷹キャンパス」ではなく、2016年に開設された「井の頭キャンパス」です。ご注意ください。

◆大会テーマ

「いまあらためて、語用論とは何か？」

◆主なプログラム

開始時間などに細かい変更がありえますが、大まかなプログラム進行はこの通りです。

《12月1日(土)》

10:00～11:55 ワークショップ

11:30～ 受付開始

12:00～14:35 口頭発表①

14:35～15:35 ポスター発表

15:45～16:05 会員総会

16:10～17:40 招待講演 伝康晴氏(千葉大学)

17:50～ 懇親会

《12月2日(日)》

9:20～ 受付開始

9:50～11:45 口頭発表②

11:45～12:45 昼食休憩

12:45～14:15 語用論グランプリ！
(1st stage A)

14:20～15:50 語用論グランプリ！
(1st stage B)

15:55～17:00 語用論グランプリ！
(Final stage) 表彰

17:00～17:10 閉会のあいさつ

◆第1回 語用論グランプリ！

日本語用論学会第21回全国大会では、学会の新しい第1歩として、「第1回語用論グランプリ！」を開催します。ここでは、語用論グランプリ！の趣旨と企画内容をご説明いたします。

まず、語用論グランプリ！の狙いは、語用論に関わる多数の先生方にご登場いただき、ご自身の研究や理論分野の楽しさ、すばらしさ、語用論とのつながりなどを紹介してもらおうことです。それを会員や潜在的な会員の方にアピールできるよう、「グランプリ」形式を用いました。日時は二日目(日曜日)の午後です。

今回ご登壇いただく6名の語用論および語用論関連分野の先生方は以下の通りです。



椎名美智先生(法政大学、歴史語用論/ポライトネス)



西阪仰先生(千葉大学、会話分析)



松井智子先生(東京学芸大学、関連性理論)



井上逸兵先生(慶應義塾大学、社会言語学)



大堀壽夫先生（慶應義塾大学、認知言語学）



西田光一先生（山口県立大学、新グライス派）

以下は、進行の一案です。まず、1st stage A として 3 名がご自分の研究や理論を紹介していただきます。その際、3 名で共通に検討できるお題ひとつ（文脈、発話行為、推論、話者の意図、ダイクシスなど）について言及していただきます。最後に、3 名の中でもっとも自分の理論や語用論に対して「情熱」を感じられた方といった基準で、フロアの投票で一番得票数の高かった人を 1 名選出します（計 1 時間半）。その後 1st stage B を同様の方法で行います。それぞれの 1st stage から、1 名ずつ計 2 名が Final stage に進みます。

Final stage では、1st stage と似た形式で、ご自身の分野について簡単にお話いただき、互いに質疑等を交えながら（文脈、発話行為、推論、話者の意図、ダイクシスなどといった）語用論的概念についてお話を聞き、1st stage と同じ方法で優勝者、準優勝者を決定します。ただ、グランプリの枠組みはひとつの遊びの仕組みに過ぎず、語用論および語用論関連分野の先生方の研究手法、理論およびそれぞれの理論と語用論の関連についてお伺いするのが第一の目的です。オーディエンスの応援も重要な要素になりますので是非奮って参加ください（なお、第 2 回があるかどうかは定かではありません）。

（文責・鍋島弘治朗）

◆発表募集

発表言語は日本語と英語のいずれかで、発表形態は、口頭発表、ポスター発表、ワークショップの 3 種類です。なお、ワークショップにつきましては、一つのテーマについて様々なアプローチから深く検討し研究者の交流が図れる良い機会でもあり、今後も一層促進していきたいと思っておりますので、皆様是非奮って応募いただきますようお願いいたします。以下に応募要領を示します。公募日程は下記の通りです。

- 投稿締め切り：2018 年 7 月 31 日(火)
- 採否通知：2018 年 9 月下旬
- 大会 Abstract 原稿締切：2018 年 10 月 12 日(金)

- 大会発表論文集(Proceedings)原稿締切：2019 年 3 月 31 日(日)

①申し込み資格

申し込みには、口頭発表の第一発表者（もしくはワークショップの代表者）が会員である必要があります。

②発表形態

- 1) 口頭発表：発表 25 分＋質疑応答 10 分
- 2) ポスター発表：1 時間（掲示時間）
- 3) ワークショップ：1 時間 40 分（司会者を含めて 3 名以上の団体）

③発表言語

日本語もしくは英語

④発表申し込みについて

発表要旨は「マイページ」から投稿してください。投稿受付ページは 6 月初旬に稼働予定です。投稿の方法はホームページ上で後日紹介します。

⑤申し込み原稿の形式

発表の種類にかかわらず、申し込み原稿はすべて同じ体裁です。

用紙サイズ：A4

規定文字数：日本語 2,500 字以内、英語 500 words 以内。文字数（日本語）もしくは word 数（英語）を、原稿の末尾に記入してください。

ファイル形式：Microsoft Word 形式（doc、docx）、PDF 形式(pdf)

- ・氏名と所属は記入しないでください。
- ・発表タイトルの後に、一行空けて本文を記入してください。
- ・ワークショップは、全員分の要旨を規定文字数以内に取りまとめてください。
- ・文字数と word 数の数え方については、例文、表、キャプション、注釈を含みます。ただし、図形内のオブジェクトに添えられた文字や、参照文献は含みません。日本語原稿の中に英語のアルファベット等の半角文字を含む場合は、半角文字で 2 文字を、全角文字の 1 文字とみなします。
- ・参照文献のフォーマットは『語用論研究』に準じます。また、規定から逸脱した形式、ファイルで応募した場合は、不採用となる場合があります。

⑥申し込み原稿の留意事項

申し込み原稿には、表現や構成のわかりやすさと説明の一貫性が求められます。また、以下のような点について過不足なく論じる必要があります。

- ・ 問題となる現象
- ・ その現象についての先行研究と問題点
- ・ 現象の分析に用いるデータ
- ・ 現象の分析方法
- ・ 現象の分析結果
- ・ 分析結果に基づく結論と理論的含意

⑦申し込み制限

一人の会員が申し込みできるのは一大会につき2件まで(Workshopを「含む」)です。ただし、このうち第一発表者(またはWorkshopのCoordinator)として申し込みできるのは1件に限られます。

⑧二重投稿の禁止

口頭発表・ポスター発表・ワークショップへの発表申し込みにおいて、二重投稿を禁止します。大会運営委員会が二重投稿と認めた場合、その申し込みを受理せず、また次年度の大会での、当該の申込者を発表者を含む発表申し込みを受理しません。

※1.二重投稿とは、他の学会で既に発表した、もしくは発表の申し込み中である内容、また、既に学術的刊行物に掲載された、もしくは投稿中である論文と極めて類似する内容で申し込みをすることです。

※2.学士論文、修士論文、博士論文は、まだ公表・出版されていない場合には、「学術的刊行物」に含めません。

※3.既に学会の発表や学術的刊行物への応募で不採択が決定している内容での申し込みは、二重投稿に含めません。

⑨選考結果について

選考結果は9月下旬に第一発表者に通知します。

⑩発表会場に現れない、もしくは、ポスターを貼ってあるだけで説明員がまったくいないなどのいわゆる“**No Show**”に対する措置

発表が採択されたにもかかわらず、大会当日に大会運営委員会に無断で発表を行わない、もしくはポスターの掲示のみで説明を行わない場合に、これらを“**No Show**”とみなし、本学会のホームページにて公表します。ただし、事前もしくは当日に、また、やむをえない場合には事後に、発表を行えなかった合理的な事情の説明

があった場合には、「キャンセルされた発表」とみなします。

◆問い合わせ先

E-mail : presentation -at- pragmatics.gr.jp (大会発表委員長・野澤 元 宛)

投稿に関するお問い合わせは、7月17日(火)までをお願いします。

◆第21回大会会場・杏林大学井の頭キャンパスへの交通・宿泊について

[交通について]



1. 電車について

東京駅から中央線快速で「吉祥寺」(土日のみ快速が停車)まで、または特別快速で「三鷹」までお越しください。山梨・八王子方向からお越しの場合は「三鷹」でお降りください。渋谷から京王井の頭線で「吉祥寺」(終点)に来る方法もあります。

2. バスについて

「吉祥寺駅」か「三鷹駅」から、「杏林大学井の頭キャンパス行き」(小田急バス)にご乗車いただくのが便利です。所要時間は15分ほどで、会場(F棟)に隣接する学内バスロータリーにて下車することができます。

※小田急バスは「前乗り」「前払い」(現金:220円、交通系ICカード:216円)です。

○吉祥寺駅(JR中央線・京王井の頭線)南口バス乗り場【5番】(吉祥寺駅の「公園口(南口)」を出て丸井・ドン・キホーテ前)

○三鷹駅(JR中央線)南口バス乗り場【8番】

3. タクシーについて

駅からタクシーをご利用される場合「杏林大学井の頭キャンパス」とお伝えください（通常は正門前に到着しますが、会場に近いのは東門（バスロータリー側）です）。

〔宿泊について〕

会場に近いホテルは「吉祥寺第一ホテル」「吉祥寺東急REIホテル」（以上、吉祥寺駅周辺）、「三鷹シティホテル」「リッチモンドホテル東京武蔵野」（以上、三鷹駅周辺）、「ホテルメッツ武蔵境」「シティテル武蔵境」（以上、武蔵境駅周辺）です。満室等の場合には、新宿・阿佐ヶ谷・高円寺・国分寺・立川等、中央線沿線のホテルをご検討ください。お早めのご予約をお奨めします。

*** 研究会コーナー ***

◆関東地区研究会

以下の講演会を予定しております。詳細が決まりましたらメーリングリスト等でご案内します。

日本語用論学会関東地区講演会

講師：堀田隆一（慶應義塾大学教授）

テーマ：歴史語用論

演題：未定

日時：10月頃

場所：慶應義塾大学三田キャンパス（予定）

（井上逸兵）

◆中部地区研究会

中部地区研究会は、名古屋大学大学院人文科学研究科の講演会に協賛する形で、2017年12月18日に、Seongha Rhee 先生（韓国外国語大学校）の講演を開催しました。タイトルは、“Grammar of sound: Ideophones and synesthetic perception in Korean”。文法化の研究で著名な Rhee 先生ですが、オノマトペ、音象徴（sound symbolism）についての研究は、比較的最近のようです。韓国語のオノマトペの豊かさはよく知られていますが、それに加えて色彩語彙、味覚語彙も驚くほど豊富で、その体系、派生関係も非常に複雑です。本講演では、これらの語彙に見られる類像性（iconicity）、共感覚（synesthesia）などについて、興味深い議論がなされました。音、色彩、味覚に関わる諸表現、そこにある細かく微妙な差異を、楽しそうに説明される Rhee 先生が印象的でした。なお、この日のハンドアウトは、<http://srhee.net/> からダウンロードできます。

（北野浩章）

◆メタファー研究会

2017年度のメタファー研究会では、夏の陣2017(名古屋大学)、安芸の陣（広島国際大学）、two-dayシンポジウム「身体性」（関西大学）の3つのイベントが行われた。

夏の陣 2017 は「比喩と隠喩」と称し、6月4日（日）10:30-17:35 に名古屋大学東山キャンパス国際棟（国際言語センター）2階207演習室で85名の参加を得て行われた。この会は初めて発表者を公募し、9名（徐子程（早稲田大学[院]）、桑原あきら（インクルーシブデザイン研究所）、ジュシカ・タインズ（関西外国語大学[院]）、李文鑫（筑波大学[院]）、石井康毅（成城大学）、鈴木幸平（関西看護医療大学）、山本幸一（名古屋大学非常勤）、大田垣仁（近畿大学）、笠貫葉子（日本大学））が発表した。また、講演者に榎山洋介氏（名古屋大学）をお招きし、「百科事典の意味と比喩」のタイトルでお話いただいた。

2017年12月9日（土）に広島国際大学で、メタファー研究会「安芸の陣」を開催した。全体の参加者は、約50名であった。午前は、談話あるいはオノマトペに関する研究発表3件が行われた。午後、科学研究費による研究課題「会話におけるメタファー使用の動的・協働構築的プロセスに関する研究」（研究代表者：杉本巧（広島国際大学）、研究分担者：串田秀也（大阪教育大学）、鍋島弘治朗（関西大学））の成果報告会、町田章氏（広島大学）による招待発表「認知文法とメタファー」が行われた。プログラムの最後に、楠見孝氏（京都大学）、秋田喜美氏（名古屋大学）、武藤彩加氏（広島市立大学）に登壇していただき、「オノマトペ、共感覚とメタファー：3つの認知的現象をめぐって」と題してシンポジウムが行われ、オノマトペ、共感覚、メタファーの三者とその関連について活発な議論が交わされた。

2018年3月18日（日）19日（月）には関西大学でtwo-dayシンポジウム「身体性」をテーマに124名の参加を得てメタファー研究会が行われた。生態心理学の三嶋博之早稲田大学大学院教授、言語人類学の菅原和孝京都大学名誉教授、現象学、メルロポンティ研究の河野哲也立教大学教授の講演が行われた。三嶋氏のテーマは高次不変項、菅原氏はアフリカの民族グイの文化を題材にメタファーの普遍性と文化相対性を取り扱った。河野氏はバシュラールの想像力をテーマに異質なものの組み合わせに生じるメタファーとそれを理解する可能性としての進化論的身体を論じた。午前中にはプレコンファレンスとして9発表があり、午後にはミニシンポとして4つの発表と討論が行われた。また、最終日

には2日目の最終日には1時間半にわたる全体討議が行われ身体性に関する知見の深まりが見られた。
(鍋島弘治朗)

日本語用論学会 20 周年記念

《Levinson 先生講演会の報告》

日本語用論学会では去る3月15日(木)、*Politeness* (1987, Cambridge U.P.) などの著者として知られる著名な言語人類学者スティーヴン・C・レヴィンソン教授 (Stephen C. Levinson, MPI for Psycholinguistics) を講師に迎え、記念講演会を開催しました。この講演会は日本語用論学会が学会設立20周年を記念して特別に企画したもので、会場の



キャンパスプラザ京都には、平日にもかかわらず

全国から100名を超える参加者がありました。

“Spatial cognition, empathy and language evolution” (空間認知・視点と言語進化) と題する講演では、人間の空間認知が他の動物とは違って言語の概念構造の在り方と密接に関連していることを語られました。具体的検証として、いくつかの少数言語における位置関係語彙の相対性・絶対性とその母語話者の空間認知との相関を示す実験映像などもあり、教授の一貫した主張がわかりやすく、かつ説得的に示されました。2時間近い講演も短く感じられ、活発な質疑応答もあって大変有意義な講演会となりました。



(日本語用論学会ホームページより再掲)

委員会より

★『語用論研究』編集委員会より

S/P20 の投稿も締め切られ、今月中を目処に査読プロセスに入ります。

編集委員会では、基本方針を新たにし、“支える・育てる” 学会誌 S/P へ

をモットーにしてさらなる歩を進めていくことといたしました。

より詳しくは次号のニューズレター等でお知らせしたいと思います。

これからも S/P をよろしくお願いします!

(滝浦真人)

★プロシーディング委員会より

目下、プロシーディング委員会では、2017 年度 第 20 回年次大会で発表された論文をとりまとめ、『大会発表論文集』(電子媒体のみの発行) を作成いたしております。ご提出いただきました原稿は、6 月末頃に当学会ホームページ上にアップする予定です。

原稿をご提出いただいた会員の方々には、ご協力いただき誠にありがとうございます。

(竹田 (内田) らら)

《事務局より》

★平成29年度 (2017年度) 大会会計報告

収入

年会費 2 日分 (6 口)		36,000
一般 6 口 (@6,000)		36,000
大会参加費 (2 日分、222 口)		472,000
現会員事前登録 58 口 (@1,000)	58,000	
現会員・新入会員 78 口 (@2,000)	156,000	
当日会員 86 口 (@3,000)	258,000	
懇親会費 (56 口)		267,000
一般 43 口 (@5,000)	215,000	
学生 13 口 (@4,000)	52,000	
① 計		775,000

支出

発表論文集 PDF 作業費		147,420
印刷費・送料		164,026
事務局諸費		596,470
人件費	298,000	
文具費・会議費など	173,635	
大会関係事務業務委託	72,883	
コピー機使用料	43,524	
手数料	8,428	
講師渡航費・謝金		1,157,838
懇親会		400,000
施設使用料		285,756
② 計		2,751,510

① — ② = -1,976,510

収支 — 1,976,510 円**★平成29年度会計報告（案）****収入**

前年度繰越残高	3,104,421
年会費（529 口）	2,938,000
一般 449 口(@5,000/@6,000)	2,613,000
学生 78 口(@4,000)	312,000
団体 2 口 (@6,000/@7,000)	13,000
大会参加費（2 日分、222 口）	472,000
現会員事前登録 58 口(@1,000)	58,000
現会員・新入会員 78 口(@2,000)	156,000
当日会員 86 口(@3,000)	258,000
懇親会費（56 口）	267,000
一般 43 口(@5,000)	215,000
学生 13 口(@4,000)	52,000
印税	29,218
合計	6,810,639

支出

大会発表論文集 PDF 作成費	207,420
印刷費・郵送費（大会アブストラクト集・学会誌・ポスター等）	1,121,378
事務局諸費	1,017,313
人件費	298,000
文具費・会議費など	269,963
学会運営活動に対する交通費等補助	223,860
事務業務委託	120,208
コピー機レンタル料・使用料	43,524
手数料	61,758
学会システム開発	166,320
学会システム維持費	114,114
言語系学会連合会費	30,000
講師謝金・渡航費	1,481,418
懇親会	400,000
大会施設使用料	285,756
合計	4,823,719

次年度繰越金 1,986,920**★会費納入のお願い**

年会費は、一般会員 6,000 円、学生会員 4,000 円、団体会員 7,000 円でございます。11 月までに、ご納入いただきますよう、よろしくお願

申し上げます。学会口座は以下の通りです。

【郵便振替】

口座番号：00900-3-130378

口座名：日本語用論学会

【ゆうちょ銀行】

支店名：099

口座種類：当座

口座番号：130378

口座名：日本語用論学会

学会ホームページの「会費専用ページ」より、クレジットカード決済も可能でございます。会員ステータス、会費納入、会員専用ページへのログイン等に関するお問い合わせは、事務局ではなく下記までお願いいたします。

日本語用論学会 会員管理室

psj@outreach.jp

★熊本地震被災会員の皆様の会費・大会参加費免除について

2017 年度に引き続き、平成 28 年熊本地震で被害に遭われた会員の皆様に対し、お申し出いただくことにより「2018 年度会費」ならびに「2018 年度年次大会（2018 年 12 月）の参加費」を免除させていただきます。被災地の皆様方の一日も早い復興を心からお祈りしております。

免除申請先(メール、郵送、電話のいずれも可、まずはご連絡いただけましたら手続きの詳細をご連絡させていただきます。)

日本語用論学会事務局

〒606-0847

京都市左京区下鴨南野々神町 1

京都ノートルダム女子大学 人間文化学部

英語英文学科 小山哲春 研究室内

E-mail: secretary@pragmatics.gr.jp

Phone: 075-706-3670

★《新刊・近刊案内》★

■『話しことばへのアプローチ 創発的・学際的談話研究への新たな挑戦』鈴木亮子、秦かおり、横森大輔（編）岩崎勝一、遠藤智子、大野剛、岡本多香子、片岡邦好、兼安路子、鈴木亮子、中山俊秀、秦かおり、東泉裕子、横森大輔（執筆）ひつじ書房（定価 2,700 円＋税）

<http://www.hituzi.co.jp/hituzibooks/ISBN978-4-89476-818-5.htm>



話しことばについて、第一部では理論面から、第二部では実践面から切り込む。理論面では、話しことばを苗床として文法(パターン)が創発するダイナミックなプロセスについて、多彩なデータを元に論じる。実践面では、同一の談話データに対して、

相互行為言語学、社会言語学、言語人類学、ナラティブ研究という4つの視点から分析する。用いた談話データはひつじ書房HPで公開されている。これは非常に面白い試みである。重要な概念を簡潔に紹介する「コラム」を随所に設置し、読者の理解を助ける工夫もされている。(2017.12.14刊)

■『意味解釈の中のモダリティ(上)(下)』

澤田治美(著) 開拓社(定価2,000円+税)

<http://www.kaitakusha.co.jp/book/book.php?c=2572>



上巻では、Declerck、時枝、Langacker、Palmerらを引用しつつ、万葉集から現代小説に至まで様々な用例を挙げ、モダリティの定義、多様性、分類などについて論じる。本書で打ち出した「モダリティの相関性」というテーゼをはじめ、「モダリ

ティの透明化」など、語用論的な角度からの分析も豊富に提示されている。

下巻では、個別の法助動詞を取り上げ、行為の非実現性・困難性、自発的知覚、心理的衝突、断定と予測、現実性と仮想性といった観点から、個々の言葉が持つ「より深い意味」を明らかにしているが、金田一論文との出会いなどから筆者の研究人生をふり返る「あとがき」も見逃せない。いや、読み逃さない。(2018.3.20刊)

■『多人数会話におけるジェスチャーの同期「同じ」を目指そうとするやりとりの会話分析』

城綾実(著) ひつじ書房(定価5,800円+税)

<http://www.hituzi.co.jp/hituzibooks/ISBN978-4-89476-906-9.htm>



多人数会話におけるジェスチャーの同期を相互行為という観点から分析した力作である。ことばの定義も分析も全てが細かく正確。本書に筆者がどれほどの時間を費やしたかを想像すると、それをこの価格で享受するのは申し訳なく思うくらいだ。そ

れほどに、本書は「多人数会話」における「ジェスチャー」、「同期」、「会話分析」についての用語や先行研究をほぼ全て網羅し、図解しながら分析していく。必ずしも誰にでも開かれた内容というわけではないが、この分野に興味がある方にとっての必読書である。(2018.2.16刊)

■『質的研究のための理論入門 ポスト実証主義の諸系譜』

プシュカラ・プラサド(著) 箕浦康子(監訳) 町恵理子、浅井亜紀子、山下美樹、伊佐雅子、時津倫子、村本由紀子、藤田ラウンド幸世、岸磨貴子、灘光洋子、岩田祐子、谷口明子、小高さほみ、柴山真琴(訳) ナカニシヤ出版(定価3,800円+税)

<http://www.nakanishiya.co.jp/book/b345120.html>



本書はシンボリック相互作用論からポストコロナリズムまで、その理論的系譜を丁寧に系統立てて解説してくれている。入門とあるが、内容は入門をやや超えている。しかし翻訳が大変優れており、読み物としてすらずらと読めるので、例えば大学院生や、

幅を広げたい若手研究者にはお薦めである。また、何かに迷っている方は本書で質的研究をもう一度俯瞰的に見渡してみるのも良いのではないだろうか。(2018.1.30刊)

■『相互行為における指示表現』須賀あゆみ(著)
ひつじ書房(定価 6,400 円+税)

<http://www.hituzi.co.jp/hituzibooks/ISBN978-4-89476-820-8.htm>



本書は、相互行為の中で話し手が様々な対象物どう指示するかについて、聞き手の知識に合わせて表現を整えるさまを会話分析の手法を用いて解明する。

会話分析に少しでも関心がある方は是非手に取ってほしい。また、これから博士論文を書こうとしている院生には、議論を論理的に組み立てるとはこういうことなのだという理想型として見本にすべき一冊。(2018.1.5 刊)

■『限界芸術「面白い話」による音声言語・オラリティの研究』定延利之(編著)山口治彦、瀬沼文彰、ヴォーゲ=ヨーラン、金田純平、波多野博顕、乙武香里、大工原勇人、羅米良、羅希、山元淑乃、新井潤、孟桂蘭、森庸子、アンソニー=ヒギンズ、イリーナ=プーリク、奥村朋恵、宿利由希子、昇地崇明、仁科陽江、萩原順子、三枝令子、国村千代、櫻井直子、ダヴィッド=ドゥコーマン、岩本和子、林良子、楯岡求美、鎌田修(著)ひつじ書房(定価 6,400 円+税)

<http://www.hituzi.co.jp/hituzibooks/ISBN978-4-89476-905-2.htm>



「現在インターネット上で無料公開されている世界で唯一の音声動画字幕付き日本語コーパス」(本書 p.5)である「わたしのちょっと面白い話コーパス」を使用し、それを「面白さ」、「日本語研究」、「翻訳」、「日本語教育」の章に分け、合計 16

の切り口から論じている。このコーパスは、3分程度の「面白い話」を募ってビデオに撮り、インターネットに公開しネットで投票の上、上位者には商品を贈呈するコンテストをしたもので、2010 年から続けていたようだ。面白くないはず

がない。どの論考も素晴らしいが、自分ならどう分析しようか、そんな研究意欲をかき立てる 1 冊となっている。(2018.2.16 刊)

■広報委員会からのお知らせ

会員諸氏に広くお知らせしたいと思いますので、語用論関連の新刊書・近刊書の情報があれば広報委員会宛にお寄せください。ご自身の著作はもちろん、恩師・同僚・友人・指導学生の出版物、比較的目にとまりにくい日英語以外での出版物なども歓迎します。なお、紹介文は出版社によるものを利用するほか、広報委員が執筆を担当しています。

PSJ members selected this section's recently-published and forthcoming books on pragmatics. We invite you to introduce books you recently published or highly recommend, to fellow members. Little-known books, and books written in your native language are especially welcome.

～編集後記～

■今号からニューズレター編集担当になりました。よろしくお願ひ致します。今回のニューズレターは読み応えのある長さとなりました。今後も情報を提供し、また会員の皆様の声を頂戴しお届けする場として機能していければと思っておりますので、どうぞ宜しくお願ひ申し上げます。(秦かおり)

■加藤会長の第二期に突入するこのタイミングで委員の異動があり、秦かおり先生がニューズレター担当、私が広報委員長となりました。どうぞ宜しくお願ひ致します。さて、ニューズレターが昨年より WEB 版のみとなりましたが、今号からはその強みを活かした構成にしました。また、今年から新しい試みとして日本語用論学会広報委員会の Twitter アカウント (@psjoffice) も運用しております。当学会の情報は勿論ですが、語用論という分野について幅広く皆さまに知って頂けるよう情報を発信していきたいと考えております。(尾谷昌則)

日本語用論学会 Newsletter 第 39 号

発行：日本語用論学会広報委員会

発行日：2018 年 6 月 1 日

[広報委員会]

* 委員長：尾谷昌則

* Newsletter 編集担当：

秦かおり (hata@lang.osaka-u.ac.jp)

* 公式ホームページ担当：尾谷昌則

* 会員メーリングリスト担当：金丸敏幸